

安全大会決議

“人の命を大切にする友愛政治の実現を”

建設労働墜落災害 死者 2,300人
死傷者 84,000人 (過去10年間)

—究極の影の格差社会—

建設職人社会ルネッサンスを目指して!!

全国仮設安全事業協同組合

平成21年11月17日

全国仮設安全大会 in 東京

“人の命を大切にする友愛政治の実現を”

建設労働墜落災害 死者 2,300人 (過去10年間)
死傷者 84,000人

—究極の影の格差社会—

建設職人社会ルネッサンスを目指して!!

墜落災害撲滅のための手すり先行足場及び 足場安全点検等の法制化を求める決議

我々は本組合設立以来、建設職人社会ルネッサンスを目指し、墜落労働災害撲滅を期し、制度改正を求めるなど営々として安全活動を展開してきた。その成果は、60年振りの足場に関する労働安全衛生規則の一部改正と安全衛生部長通達の発出として結実し、それぞれ本年6月1日に施行・実施された。

しかし、本組合において、本年9月の時点で全国に3,400の建設現場を抽出し、全組合員参加によりその遵守状況を調査したところ、我々の期待は完全に裏切られた。民間建設現場においては、その多くが「交差筋交」に「下さん」のみを設置した足場であり、安全衛生部長通達にある「手すり先行足場」を採用している建設現場は驚くことにほんの5%にしか過ぎなかった。

本来、改正労働安全衛生規則と安全衛生部長通達は一体のものとして捉えるところに今回の改正の意味があり、安全衛生部長通達実施の徹底は労働基準監督署の重大な責務であったにも拘らず、建設現場において完全に無視された。足場の組立て・解体時の墜落の危険は相変わらず放置されたほか、「働きやすい安心感のある足場」は確保されなかった。まさにその証左となる一つの痛ましい死亡事故が本年8月24日、発生した。安全衛生部長通達にある「据置き方式の手すり先行足場」を使用しておれば起きなかった墜落死亡災害である。これまで墜落死亡災害が発生すると、原因はいつも命綱を着けていなかった被災者に帰着させ、ヒューマンエラーの自己責任として処理されてきた。こうした「弱者へのおしつけ文化」の積み重ねが、過去10年間で墜落のみによる建設労働災害死傷者が84,000人、死者が2,300人にも上るといふ「究極の影の格差社会」を生み出してきたのである。今回、そんな格差社会に取り残されてきた建設職人に、やっと光が当てられたはずではなかったのか。一体、今回の労働安全衛生規則の改正、安全衛生部長通達の発出とは何だ

ったのか。我々は強い憤りを抱かざるを得ない。

近年、厚生労働省は、労働災害統計に基づき、建設職人の死亡事故は減少傾向にあると報じている。しかしながら、この統計には、本来労働者でありながら事業主として扱われているいわゆる「一人親方」の死亡事故は、年々急増しているにも拘らずカウントされておらず、また、公共事業に係る元請けの経営事項審査にも反映されていない。このように、一人親方問題は真の労働社会をゆがめてきたと言わざるを得ない。

今日^{きょう}現在、毎日毎日 20 人以上の仲間が墜落災害によって死傷しているという厳粛な事実があり、最早一刻の猶予もない。

よって、国の政治は、墜落災害を根絶することによって格差社会をなくすという強い決意を持ち、高さ 2m 以上の高所作業においては命綱に頼ることなく必ず足場を設置するという認識の下、以下の三点を直ちに実現するよう強く要請する。

- 一 手すり先行足場及び足場の安全点検など、安全衛生部長通達の内容の全てを直ちに法制化せよ。
- 一 労働基準監督署は、上記安全衛生部長通達の実施を徹底するよう現場監督指導を直ちに強化せよ。
- 一 いわゆる「一人親方」は制度的に労働者として位置づけよ。

以上、人の命を大切にす友愛政治の実現を求め、決議する。

平成 21 年 11 月 17 日
全国仮設安全大会 in 東京